特集1

荒尾の干潟は渡り鳥のオアシス

写真提供：村中　猶由紀さん（南増永）2007年5月撮影

熊本県西北端に位置する荒尾市は、西に有明海という豊かな海を持っています。
この有明海に面した荒尾の海岸が今、静かに話題を呼んでいます。
シギ・チドリ類が多く訪れる、日本でも有数の豊かな海岸である…と。

4月17日（日）の晴れた朝、蔵満海岸に、多くの人が集まりました。「有明海・探鳥会in荒尾海岸」―有明元気づくりと日本野鳥の会熊本県支部の共催によるバードウォッチングが開催され、市内外からおよそ80人が参加しました。

荒尾の海岸では、主に春と秋に多くの渡り鳥を見ることができます。訪れる鳥はシギ・チドリ類を中心に、およそ37種（4月17日の探鳥会実績）。時には絶滅を危惧されている鳥の姿を見ることもできます。

有明海は日本最大のシギ・チドリ類の飛来地ですが、環境省の調査によると、平成20年春に、荒尾の海岸に飛来したシギ・チドリ類は6千500羽以上。これはなんと、日本で2位の飛来数です。

これらの渡り鳥は、春はシベリアなどの繁殖地に向かう途中に、秋はオーストラリアなどの越冬地へ向かう途中に、中継地として荒尾の海岸に立ち寄ります。

荒尾の海岸は今や、渡り鳥のオアシスとして知られるようになって来ています。それは水鳥の棲息に欠かせない干潟が減少しつつある中で、荒尾の海岸の存在感を示すものです。

有明海には、日本の干潟の40％以上が集まっています。そこにあって、荒尾の海岸の干潟は単一干潟の面積としては日本一を誇ります。さらに、昭和53～63年の調査において、面積の減少がみられなかった希少な干潟でもあります。

▲4月17日（日）、蔵満海岸で行われた探鳥会。住民の皆さんや、野鳥の会会員などが参加しました。望遠鏡、双眼鏡やカメラ、図鑑を片手に、どんな鳥がいるのか1時間ほど観察しました。

荒尾海岸は鳥にとってはメジャーな場所

「鳥の目から見た荒尾の海岸は、なくなったら渡りができない大切な場所ですよ」と語ってくれたのは、日本野鳥の会熊本県支部の安尾征三郎さん。有明元気づくりと日本野鳥の会が、探鳥会を共催するきっかけを作った一人です。

「荒尾の干潟は、鳥たちにとってはすでにメジャーです。シベリアやオーストラリアから出発するとき、荒尾の海岸を目指して飛んでくるんです」と、鳥の視点から見た荒尾の海岸の魅力を話します。また、「20メートルの距離で鳥が観察できる貴重な場所ですよ、と、全国の野鳥ファンにも荒尾海岸の魅力をアピールしています」と笑顔を見せました。

「皆さんの協力で、荒尾の海岸を人間にもとってもメジャーにしたいですね。そして、名実ともに鳥の楽園にしたいです」と、夢を語りました。

安尾　征三郎●やすお　せいざぶろう　1939年生まれ、東宮内在住。日本野鳥の会熊本支部に所属。三池島アジサシ調査委員長を務める。

豊饒の海、有明海 その干潟の性質と作用

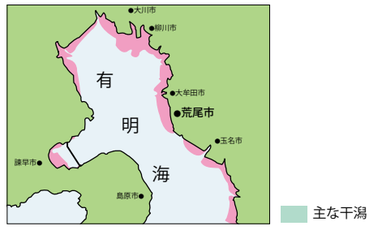
有明海は、熊本・福岡・佐賀・長崎の4県に囲まれた内海で、日本最大の干満の差（最大6m）と干潟面積を誇ります。

干潟とは河口域に発達し、干潮になると露出する砂泥質の平底のことです。干潟の形成には、入り江や湾があること、流入する河川があることなどのさまざまな条件が必要です。

干潟は海の生態系の中でも特異な場所で、底生生物をはじめとする多種多様な生物の宝庫です。また、干潟がある海は、生物による浄化作用が強く働いています。例えばアサリガイは、1時間に1ℓの水をろ過する能力があるといわれています。

また、有明海の濁った海水はデトリタスと呼ばれる有機成分が多く含まれるなど栄養が豊かで、干潟に生息する生き物の生態系を支えています。

有明海の豊かさは、干潟の生態系と、そこに棲む生物たちが発揮している優れた浄化能力に支えられています。



▲荒尾市とその周辺の主な干潟
WWFジャパン公式サイト（http://www.wwf.or.jp）を参考に作成

荒尾海岸に集まる鳥たち

荒尾海岸に集まるシギ・チドリ類の中で、代表的な鳥たちです。

1 オオソリハシシギ
荒尾では春に多く見られる。
体長約40cm。

2 キョウジョシギ
九州では荒尾海岸だけで見られるという。
体長約20cm。

3_ シロチドリ
荒尾では春・秋に多い。
体長約17cm。

上3点の写真提供：西村　誠さん（蔵満）

失われつつある干潟
鳥は環境のバロメーター

◀波打ち際にいる渡り鳥を、図鑑で調べながら観察します。

「シギ・チドリの数に圧倒されました。毎日見られるのは幸せですね」「干潟はだんだんなくなっていますから、荒尾海岸もぜひ守っていって欲しいですね」

4月17日（日）の探鳥会には、兵庫県の吉田勝治さん（篠山市）と西崎祐一さん（三田市）が参加していました。二人は口をそろえて、荒尾海岸の自然環境を讃えてくれました。

「鳥は環境のバロメーターなんですよ」とインタビューのときに話してくれたのは、前出の安尾さん。鳥が環境のバロメーターとは、どういうことでしょうか。

平成22年度版環境白書によると、「湿原等の湿地は、多様な動植物の生息・生育地等として重要な場です。しかし、これらの湿原などは全国的に減少・劣化の傾向にあるため、その保全の強化と、すでに失われてしまった湿地の再生・修復の手だてを講じることが必要です。」とあり、さらに「平成13年度に選定した「重要湿地500」について、引き続きこれらの重要湿地とその周辺における保全上の配慮の必要性について普及啓発を進めます。」と記述されています。

1945年におよそ8万ha存在した日本の干潟は、1988年にはおよそ5万1千haになり、現在も減少し続けています。現存する干潟などの湿地を守ろうと環境省が選定した「重要湿地500」には、有明海の干潟も含まれています。荒尾海岸については「シギ・チドリ類の個体数が春・秋に多い」という選定理由が述べられています。

また、環境省による環境調査「モニタリングサイト1000」では、荒尾海岸は、シギ・チドリ類の調査地点として重要な「コアサイト」に指定されています。

シギ・チドリ類は干潟の生態系の上位に位置し、比較的数が多く、より栄養段階の低い生物層の変化を受けやすいとされています。つまり、シギ・チドリ類は、栄養豊かでえさの多い干潟に多く、荒れた干潟には飛来しないのです。

そして、鳥は姿を見つけやすい生き物です。多くのシギ・チドリ類がいることは、豊かな干潟であることを多くの人が目で確認し、干潟の環境を知ることができるから「環境のバロメーター」なのです。

▲兵庫県三田市在住の西崎祐一さんは、長期出張中に参加。「干潟が残る自然は貴重です」と話しました。

背景写真提供：村中猶由紀さん（南増永）2007年5月撮影

堤　慎二●つつみ　しんじ
1953年生まれ。緑ケ丘3丁目在住。環境保全課課長補佐。市の環境部門に30年以上にわたって携わっています。

干潟が失われる原因は、埋め立てや干拓などの土地利用、治水や開発、水質汚染やごみの問題など、複合的な要素が絡んでいます。簡単に解決できない問題もあれば、一概に良い悪いで判断ができないものもあります。

では、今私たちが荒尾の干潟を守るためにできることは、どんなことでしょうか。

「干潟を守るということを、大げさなこととして考えなくてもいいんです」

そう話すのは、環境保全課の堤慎二課長補佐です。堤課長補佐は、干潟を育む環境のために「ちょこっとがんばり」と「当たり前のこと」をしてほしいと語ります。

「たとえば、海に行ったときにビニールごみや空き缶を見かけたら拾って帰るとか、ちょとした気づきを行動に移してもらうちょこっとがんばりをして、花火のごみを持ち帰るとか、釣りに行ったら釣り針や釣り糸を持ち帰るなど、持ってきたごみは持ち帰る。当たり前のことをすればいいんです」

ごみを捨てないこと・拾うことは、すぐにできる環境を守る取り組みです。漁協関係者、学校や元気づくりなどの団体ではすでに、海での催しの前などを利用し、海岸の清掃活動に取り組んでいます。

「荒尾の海岸の自然を楽しむところから始めてください」と、課長補佐は言います。

地域の自然を楽しみ、好きになり、帰りに一つごみを拾う。

私たちの手が小さな行動を起こすことから、シギ・チドリが飛び交う豊かな荒尾の干潟が守られていくのです。

地域の自然を好きになる
そこから始まる、環境への取り組み

荒尾海岸の冬の夕景

荒尾市が持つ魅力の一つに、有明海が挙げられます。アサリガイ、ノリやマジャクの漁場としても豊かな恵みを与えてくれる海は、日本有数の渡り鳥の飛来地でもありました。鳥をはじめとする多様な生き物がすみやすい環境は、人が住む環境としても素晴らしく、誇るべきものです。

市外からも渡り鳥の観察に人が訪れる荒尾の干潟は、世界的に干潟が減少しつつある今、保全していこうという動きが始まっています。

昔から私たちは生活の中で、荒尾の干潟を上手に活用しながら、そこに生きる生き物と共存してきました。その共存関係を保ちながら、遠い未来まで、人間も生き物も住みよい環境であり続けるためには、まず荒尾の海岸の魅力を知り、生かすことを考え、好きになること。そして自分にできる小さなことから、始めていくことではないでしょうか。

荒尾をより住みやすいまちに―。ヒントは「渡り鳥のオアシス」にありました。

参考資料：「荒尾市史（環境・民俗編）」平成12年、荒尾市・刊／「くまもとの野鳥」平成21年、日本野鳥の会熊本支部・刊／「西日本の干潟」山下弘文・著、平成8年、南方新社・刊／「有明海市民探鳥会 in 荒尾海岸」報告書　安尾征三郎／環境省ホームページ／WWF公式サイト／荒尾市ホームページ　ほか